

西丹沢小川谷



遊泳する大西会員

期間：令和5年8月27日（日）

山域：小川谷廊下

参加者：河本嘉照（リーダー）、久保田奈緒、大西純平、石田哲也（JECC）

コースタイム：玄倉駐車場（07:38）→小川谷出合（08:07）→小川谷廊下（09:21）→中ノ沢（09:28）→ワナバ沢（10:53）→ヒエ畑沢（12:05）→デッチ沢（14:36）→西丹沢県民の森駐車場（16:29）→小川谷出合（17:31）→玄倉駐車場（18:04）

連日 35 度以上の猛暑が続く中、ユーシンブルーで有名な丹沢の秘境、小川谷廊下にリーダー河本、新人久保田と大西、JECC の石田で沢登りに向かった。私、大西は 7 年前に日本古来の溪流釣りであるテンカラ釣りを始めたが、初年度 3 回目に行った釣り場がユーシン溪谷であった。その際は、玄倉駐車場に車を停めた後、マウンテンバイクで林道を延々と走り、初めて目にしたユーシン溪谷の眩いばかりの蒼さに感動したのを憶えている。神奈川にもまだこんな清流が残っているとは。今回の山行で、そのユーシン溪谷の中でも抜きん出て茗溪とされる小川谷廊下に行くことになった時、いやが上でもテンションが高まった。玄倉駐車場に到着した朝、既に強烈な日差しが燦燦と照っており、自然と汗がにじみ出てくる。体感気温で、30 度くらいはあったかと思う。それぞれ、溪流靴に履き替え、思い思いに溪流の支度をする。河本、久保田は化繊のズボンに長袖、大西は化繊のパンツに 2 ミリのネオプレーンタッパに T シャツという装いだ。石田は前日の山行の直後で体調が万全ではないとのことで、今回は小川谷廊下の入り口付近で引き返す予定だ。林道の入り口には、チェーンがしてあり車両通行止めになっている。そこをまたいで、林道を快適に歩き徐々に標高を上げていく。小一時間で最後の堰堤を超えたすぐ横に小川谷廊下の入り口があり、そこから入渓する。だだっ広い河川を歩き、右岸に進路を取りながら、沢を右に巻くと F1 の手前に出る。火照った身体を冷やそうと河原で顔を洗おうとしゃがむと、沢靴に蛭が何匹か付いていてうねっている。先ほどの斜面を横切った時についたのだろう。すぐに手で払い落した。帰りの林道巻きが思いやられる。ふとすると、上流から顔面蒼白の男性が小走りにこちらに寄ってきた。何か尋常ではない様子なので、“どうしたのですか？”と声をかけると、F2 で滑落事故が起きて、救助を求めに下山中だと言う。どうやら先行パーティーの男性が F2 を登ろうとした時に滑落して、前歯が欠け、足の骨折の疑いがあるという。滑落した男性の同伴者が救助を求めに、既に下山しており、彼もバックアップのために来たという。なんと親切な人なんだろう。F1 に到着すると、下部から F2 の事故現場が見え、アルミシートに包まって座っている男性とそばに付き添っている女性の姿が見える。F1 は軽々と通過し、彼らのそばにたどりつくと、座り込んだ男性の口からは流血の跡が見える。その 30 代前後の男性に何が起こったかを聞いたが、話口調はしっかりとしており、口以外からの流血はない模様だった。一番の痛みが左足首で、つま先の感覚もほとんどない状態だった。頭部、脊椎損傷の疑いはなく、命に別状はないようだ。既に同伴者が救助を求めに動いていたので、自分らにできることは他になく、申し訳ないが先行させていただいた。この滑落事故を目の当たりにしたので、嫌な緊張感が走る。F2 であるが、ゴルジュ地形のど真ん中に直径 4 メートルくらいの巨石が横たわっており、岩の左に本滝、右側にも滝がとめどもなく流れ落ちていた。山行前にネットで下調べをした際に見た感じだと、岩の右側には滝がなく、そこを両足で突っ張って登っていた記録があったが、今日は通常より水量が多く、この状況だとそうはいか

ない。リーダー河本がここはリードし、ちょうど背の届くところにピトンが打ち込まれていた
ので、それを足掛かりに、アブミを使って這い上った。そのすぐ上にある 2 つ目のピトンにさ
らにアブミをかけて、難なくクリアできた。彼の力量には感謝しかない。F3 は、6 メートルの
滝で、その淵は腹くらいの深さがあった。大西は、泳ぎながら淵を突破し、濡れるのを楽しみ
ながら滝の左側を登る。河本と久保田は、濡れるのを嫌ってか右側の苔むしたルートを登る。
沢登は、面白い。私、大西にとっては、濡れることを度外しした場合、明らかに左のルートの方
が登りやすいように見えた。彼らの考えは違ったのだろう。沢登りは、必ずこのルートを登
らなくてはいけないということはなく、自分の好きな道を突き進めばいいのだ。その自由さが
好きだ。さらに遡上するにしたがって、ユーシンの透き通った蒼色はその色濃さを増して、標
高が上がるにつれて、水温も下がっていき、次第に神経が研ぎ澄まされていく。花崗岩で形成
された、ユーシンの沢は他の沢と比べると格段に透明度が高く、ところどころおそらく何百年
もかけて作られた天然のウォータースライダーがあり、上部から滑ってみたくなった。おそら
く、沢登りにきて、滝を滑り落ちる人はあまりいないだろうなと思いつつも、やってみたく
なった。怪我だけはしてはいけないので、滝の淵まで戻って、十分な深さがあるのを確認した
後、ダイブした。爽快だ。こんな愚行をするのは自分だけだったが、2 人は文句を言うことも
なく、温かく見守ってくれた。

途中、何度か魚影を確認できた。こんな何本もの急峻な滝を溯上できるのは、おそらく、岩魚
であろう。岩魚は、山女と違い、垂直な滝さえも腹で這いつくばって登ってこれるという。ま
さか、こんなに多くの人が入っている沢で、魚はいないだろうと、高を括っていたが、そうで
はなかった。テンカラ釣り師として、その場で竿を持っていないことに後悔した。

朝、玄倉駐車場の駐車場を出発する際に、私が今日リードしてみたいと言ってしまっていたの
で、この先ロープを出す箇所があれば、率先してリードしたいと思っていた。そうすると眼前
に巨大な 3 段の滝が見て取れた。まじか？初めの 2 段は大したことは、ないように見えたが、
最後の滝が巨大で初見、登るのは無理と思った。実は、途中大学生の山岳部らしき 2 人パーテ
ィーに追い抜かれたのだが、彼らがちょうど最後の大滝の左横の大岩を巻いてリードして登っ
ている最中であつた。それを見て、これが通常のルートだと思った。彼らが登り終わった後、
私がリードさせていただき 3 段の滝を突破した。

クライミングに集中していて、気が付いたら午後 2 時近くになっていた。その際、食事もまとも
にしていなかったのも、皆で休憩しようということになり、冷えた身体を休めるべく、途中の
岩の荒れ目からあふれ出ている湧き水をペットボトルに入れておいたので、その水を使って暖
かい紅茶を入れ、一息つくことができた。そうしている内に、雲行きが怪しくなり、次第に雨

足が強くなってきた。沢で最も気を付けなくてはならないのは、鉄砲水だ。友人から以前に尾瀬で溪流釣りをしていた時に、天気が良かったのに、突然沢の水が茶色く増水してきて、その瞬間鉄砲水に見舞われたことを聞いたことがあった。その際は、幸いにも瞬時に尾根の方にエスケープしていたので、事なきを得たが、鉄砲水にあったら、いちころだ。自然の変化に気をとどめながら、遡上した。



河本会員と久保田会員



河本会員

途中、リスクのあるルートは、可能な限りロープをだして遡上していたせいもあってか、通常のコースタイムより時間がかかっている模様であった。ようやく小川谷廊下の終了点である、崩落した堰堤のある滝に到着。そこには、堰堤と巨大な岩がおりなす回廊が形成されており、小川谷廊下の終了点にふさわしいトンネルであった。その先は、河川敷が広がっており、左岸に丁寧にもケルンが積んであった。そこから容易に巻き道に入れた。帰りの巻き道は途中不明瞭な箇所もあり、正確なルートファインディング能力が求められる。我々3人は蛭の格好の餌食にさらされた。小さな沢をまたぐたびに、あっという間に足元に蛭が10匹くらいまとわりついている。後ろから久保田さんからたびたび奇声が聞こえる。数分おきに足元を確認するが、きれいに払ったはずだが、また新たな蛭たちが足元や首の裏などまとわりついてくる。湧いてくるという表現が適当だろうか、きりが無い。蛭と友達になるしかないと思った。半ば、蛭の猛攻には観念して、玄倉駐車場に到着。皆、足元が血だらけであった。帰路は、沢での疲れを癒すべく、町営のさくらの湯（500円）に立ち寄った。



太西会員のトップビレイ



帰りのまきみち